

## 計測器校正の勘どころ

表記編(第2回)・単位の表記法

アンリツカスタマーサポート株式会社  
計測テクニカルセンター  
山崎 俊雄

## 《はじめに》

前回は国際単位系(SI)が普及するに従い、数値や単位の表記方法にも一定の規則が定められていることをお伝えいたしました。今回は、具体的な事例を交えて、その表記方法を眺めてみたいと思います。普段何気なく眺めている技術書や論文が、どの程度この表記に従っているかを観察するのも面白いかもしれません。

## 1. 単位記号の表し方

それでは、単位記号の表記上の原則を、実際の事例を交えて眺めてみることにしましょう。

- ① ローマン体(立体)を用いる。原則として単位記号は小文字で表し、その名称が人名に由来する場合は記号の最初の文字は大文字で表す。

例: ○ Hz :ヘルツ(Hertz)

× Hz :ヘルツ(Hertz)

- ② 10進の倍量及び分量を表す接頭語を用いる場合、それは単位の一部であり、単位記号の前に置く。空白(スペース)などで単位記号と分割してはならない。

例: ○ 100 kHz、10 MHz、1 GHz

× 100 k、10 M、1 G Hz

- ③ 数値は常に単位の前に置き、数値と単位を分割するために空白(スペース)を用いる。

例: ○ 100 kHz

× 100kHz

## 2. 単位記号の表し方のポイント

①は比較的区別しやすい原則です。多くの単位は人命に由来しており、その技術の歴史的な背景を想像すれば容易に判別することができます。

②は技術文書を書くときに、つい陥りがちな過ちです。接頭語と単位は一体であり離してはいけません。

③は一般的な技術文書でときたま見かける事例です。空白(スペース)は文字幅と同じではなく「1/2にする」という文献も見られますが、文書作成ソフトなどで実現するのは難しく、1スペースが現実的でしょう。

## 3. 単位記号の組み合わせの表し方

次に単位記号を組み合わせる場合の表記上の原則も、実際の事例を交えて見て見ましょう。

- A) 複数の単位の積により表現される組立単位は、それぞれの単位記号を中黒点、または空白(スペース)で区切らなければならない。

例: N・m または N m

- B) 複数の組立単位の商により表現される組立単位は、スラッシュ、または負の指数で表されなければならない。

例: m/s または  $m \cdot s^{-1}$

- C) 一つの組立単位の中で二つ以上のスラッシュを用いてはならない。ただし、複雑な単位の組み合わせに括弧または負の指数を使用することは認められる。(但し括弧の2回以上の使用は不可)

例: ○  $m/s^2$  または  $m \cdot s^{-2}$

○  $m \cdot kg/(s^3 \cdot A)$  または  $m \cdot kg \cdot s^{-3} \cdot A^{-1}$

× m/s/s ×  $m \cdot kg/s^3/A$

## 4. 単位記号の組み合わせの表し方のポイント

こちらは、比較的原則に従い易い法則です。日常的に用いる単位記号に、あまり長いものは用いられないことを考えれば、さほど心配には及ばないかもしれません。

もちろん、これらの原則に対して、いくつかの例外が存在することは確かです。L(リットル)は小文字(l)で書くと数字のイチ(1)と区別できないので、大文字と小文字の両方での表記が認められています。

次回は数値の表記方法をご紹介します予定です。

## チェック!

国際単位系(SI)により、単位記号や組立単位記号の表記方法が推奨されています。人名に由来する単位は先頭を大文字で、それ以外は小文字で記述します。数値と単位の間には1スペースが正しい表記法です。